

府中町ふるさと歴史散策

〔第4回〕

多家神社の神輿倉と貴船神社

大正4年（1915年）9月の

こと、早朝の鎮守の森にまつ、赤な火柱が上がった。火の勢いは増すばかりで、しばらくして火事を知らせる半鐘が激しく打ち鳴らされた。しかし、その時はすでに遅く、神社の本殿も拝殿も黒煙と炎に包まれて全く手のつけようがなかった。多家神社の炎上である。...

同じ境内にある二つの建物は、火災からまぬがれることができた。神社の神輿倉と境内の石段下の貴船神社の本殿である。神輿倉は、広島城・三の丸にあったものを、旧藩主の浅野公が神社に寄進されたものと伝えられている。松皮葺向付付入、高床校倉造である。屋根は松皮の皮を秋にはいで、それを重ね合わせて竹釘で貼り付けたもので、前に長く垂れた部分を向拝といい、滋賀県日吉神社に代表されるものと同一様式である。床の高いことは、先年、私がカンボジアを訪ねたトレンサップ湖のほとりの住居と同様に、床下の通気をよくして、鼠や害虫の侵入を防ぎ、湖の増水した時も安全で、滅水した時は下を生簀にして、食料の貯蔵に用いていた。東南アジアに普及している建物と共通の目的である。

普通の校倉は、奈良県正倉院や唐招提寺に見られるように、角を落した二等辺三角形の校子の底辺が内側になるように井桁に組んである。こうすると校子の材質と形で、外部の湿気が強ければ間を閉ざし、乾いた時には、外気を通して乾湿の自律作用によって、宝物の保存には適した建築物である。

多家神社の校倉が注目されるのは、校子の断面で四角形の校子の上下二辺の角を落した六角形で、全国に現存する校倉造り31棟のうち、唯一のものだそうである。この校子の断面は、絵巻などでは見ることができない。『信貴山縁起絵巻』には、命蓮という僧の托鉢で、

山崎の長者に喜捨をたのんだところ、長者は鉄鉢を米倉に閉じ込めてしまったので、気がついた時には鉄鉢は、千石の米を入れた倉と共に空高く飛び去ってしまったという「飛倉の巻」の左上に描かれているものである。

私は、京都洛北の高山寺、平安末期、鳥羽の僧正覚範の画いたと伝えられる『鳥羽戯画』第4巻中、第3巻の後半の猿の踊りの左後ろに画かれているのは、府中にある校倉と同じであるとみていたが、それは、数年前のこと、何時かは確かめてみたいと思いながら、まだ、その機会を得ていない。

多家神社の校倉におさまられている神輿は、本体が八角形で、全体を漆塗とし、金銅の金具で飾られている。屋根の頂部に鳳凰（現在は欠失）を乗せた鳳凰という最高格式のもので、県下に現存する神輿のうちで最も重要なものの一つである。この4月4日に行われ

る春季例大祭で公開されるそうである。

また、貴船神社の本殿は、神武天皇東征伝説とも関係が深く、明治43年（1910年）12月、山田稲生神社からこの地に移設されたものであるが、古来の想い出ばなし等を、総合してみると、どうも私の資料とは、食い違いが多いため、精査して、何れ稿を改めたい。

府中町文化財保護審議会委員

久保 博



多家神社の神輿



『日本の絵巻4 信貴山縁起』飛倉の巻（中央公論社）

問い合わせ

教育委員会生涯学習課

☎ 286-3272

